

Michael K. Iwama (著), 松原麻子, 清水 一, 宮口英樹 (訳)

川モデル 文化に適した作業療法

澤田 辰 則

友 利 幸之介

(イムス板橋リハビリテーション病院, 作業療法士) (神奈川県立保健福祉大学大学院, 作業療法士)



作業療法の理論に興味をもつ OT は, Michael K. Iwama 氏の川モデルについて一度は耳にしたことがあるであろう。しかし, その内容については実はあまり知られていないのではないだろうか? 日本の文化に根ざした川モデルであったが, 矛盾することに日本語で詳しく説明されている成書がなかった。逆輸入という言葉が適切かわからないが, ようやく川モデルを日本語で学ぶことができるようにした本書の意義は大きい。

さて, 爽やかな日本の清流を連想させる装丁の本書は, 川モデルの説明だけでなく, 川モデルと従来の作業療法理論との差異について, 鋭い考察がなされており, 非常に読み応えがあった。たとえば, 個人主義である西洋文化では自己と環境を2つの別個の存在だとしており (p25), 自己と環境の橋渡しとして作業が存在する。しかし, 日本を含む東洋の文化は集産主義であり, 自己と環境等複数の要素が一つの切り離すことができない統一体に組み込まれている。環境は支配できるものでな

く, 共に存在するものであり, それゆえに2つ以上の部分を橋渡しするための特別な努力は命じられも要求されもしない (p39), と述べられている。さらに, 個人が環境を支配するという考え方である西洋の人間作業モデル (MOHO) やカナダ作業モデル (CMOP) は, 日本をはじめとした集産主義の文化で利用することは困難だと述べている。

筆者は, MOHO や CMOP を日本の臨床で活用しているが, 確かに, 臨床場面では, クライアントにとっての作業の意味は, 「だれかのために」とか「迷惑をかけないように」ということも少なくない。われわれは, 自分たちの文化的背景である集産主義について, もっと深く考えるべきであろうと反省した。これらのモデルをすでに利用している私のような者や, 逆にこれらのモデルを日本で適合することが困難だと感じる OT にも, 本書は一読の価値があると思われる。

後半部分は, 川モデルのはじまりから, その利用の仕方について

ケースも含めて紹介している。前述の個人, 神, 環境等が統一体に組み込まれた考え方のもと, 人生や健康を「川」また, さまざまな要因を「岩」や「流木」「川底」等のメタファーを用いて描写している (p134)。このようにクライアントの状態を量的ではなく質的に評価する視点は非常に興味深く, その描写の過程はクライアントとの協働作業を連想させる。先日の世界作業療法士連盟大会 (WFOT) では, 川モデルのアプリが紹介されていた。まずそこから体験してみるのもいいかもしれない。

本書は, 日本文化に根ざした川モデルの内容, 活用事例が学べるだけでなく, その他海外で開発された理論を日本でうまく適用するという部分においても, 大きな示唆を与えてくれる良書である。

B5 判 260 頁 4,800 円 + 税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357